

街>においても同様であり、必ずしも占い師の間に協調関係ないし友好関係があるわけではない。集合的形態であることによって客を奪いあっていることも、この占い師間の非協調(ないし非友好)性に拍車をかけていると思われる。例えば「ジュム占いの街」では占い師は経営者に雇われており、彼らには歩合制で給与が支払われている。この歩合制によって、集客の低い占い師は給与が低くなることもあって、互いにライバル関係(商売敵)となり、占い師の間には関係がないようである。また、いずれの<占いの街>における占い師にみることができることは、集客するために、あるいは顧客を獲得するために、占い師たちは他の占い師との差異を出すことによりかなりの注意を払っていることを挙げることができる。それは自分が占いを施す部屋(「個室」)の雰囲気作り—水晶といった小道具など—であったり、占い技法のアレンジないし特定の技法への専門化であったり、相談内容の専門化—「相性」や「仕事」といったことを専門として占う—であったりする。

<占いの街>の形態とそれ以外の形態との違いとして、その集客のあり方にあると上でふれた。このことを別の視点で見ると、各々の店舗の外観上の違いであると言えるかもしれない。とくに「宅占」の店舗は店舗として格調が高かったりする。そのことによって店のなかが見えず、どのような占い師が占っているのか窺えられず、近づきにくい面があるようである。筆者がある占い好きの若い女性に聴き取り調査をした時、彼女は「こうした店(この場合、「宅占」をしている占い師の自宅を指す)は本当に悩みを持っている人が行くところで、ちょっと気軽には占ってもらいに行きにくい」であるとか、「どんな人(占い師)がやっているのかもわからなくてちょっと怖い」と語ってくれている。この語りは、たぶんあまりにも造りが立派な自宅であったために、圧倒され、また店のなかが見えないことで、入りにく

かったためであると思われる。それにしても、この語りは「宅占」の店舗に対して近づきにくい面があることを示してくれている。それに対して、<占いの街>は「宅占」とはまったく異なる外観であると言えるだろう。<占いの街>では、ウイドウショッピングを楽しむ感じあるいはウイドウショッピングの一環として、店舗や占い師を見ることができ。確かに、<占いの街>にもエキセントリックないし一風変わった占い師もいるが、全体として気軽に占いを楽しむ雰囲気つつまれており、客は自分が気に入った占い師に占ってもらえるので、容易に店に入れているように思われる。この点で「街占」の占い師との差がでる。「街占」の場合、確かに占い師自身の顔は見ることができ。しかし、そのことが逆に近づきにくくさせる場合がある。例えば、当該の占い師がエキセントリックな人であったり、いかつい人であった場合、その外観によって近づきにくくさせうるであろう¹³⁾。その意味から、店舗そのものの雰囲気が集客を補完しうると考えることができるだろう。また「街占」の場合、プライベートの面でも行きにくいかもしれない。この点でも、<占いの街>では個室であり、集中して、占い師の話を聞くことができる¹⁴⁾。

もう一つ重要なこととして、料金体系の問題がある。<占いの街>以外の他の空間形態、とくに「宅占」や「街占」の場合、必ずしも料金が明確化されていない場合があり、このことがそうした形態の占い師から占ってもらうことを避けさせているだろう。通常、「街占」の場合は安い料金であるが、料金体系があまり明記されていないために少し近寄りがたくなると思われる。占いの料金に関して、筆者の経験を少し述べておこう。筆者は、とある「宅占」のもとで占ってもらったことがある。そこは店の外にもそしてなかにも料金表らしきものがなく、全く料金体系が明確化されていないところであった。そして、占いが終わったのち

13) 対馬路人(1987)も同様の指摘をしている。ただし、同じ流派であれば非協調性が緩和される傾向がある。

14) 筆者の経験であるが、ある「街占」形態の占い師が酒に酔った状態で店舗を出していたが、筆者が見ていた限りその日誰一人その占い師の客とはならなかったし、誰もが彼(占い師)を避けるようにして通り過ぎていた(なぜならば、その占い師は酔っ払っているが故に、くだをまいていたからである)。

15) ただし、<占いの街>の個室の壁はかなり薄く、隣の話が聞こえる。また、「宅占」や集合的形態をとらない「テナント」による形態でも、よほどきちんとしているところではないかぎり—予約制やいくつもの部屋をもっているなどの整備された環境をもつところでないかぎり、会話が筒抜けの場合がありうる。